



入院費 第20日目 狼が出た

10

ここのナースようやくこっちの手の内が読めてきたらしく、お返しが厳しくなってきた。そのころにはぼくは退院するという仕掛けで、彼女たちは悔しがっている。

トレッドミルという検査で、ただトレッドミルの上を歩くと言う運動負荷をかけて心電図と血圧を測るというものだが、めったに歩いていないぼくは土井ドクターがまだ心臓に余裕があるというのに、放棄してしまった。

これは主観的なものでしかたがない。病室にもどってきたら、新山ナースが「トレッドミルいかがでしたか？」

「足がバンバンですよ」

「筋肉痛はありますか？」

「いや歳ですから、まだですよ」

「そうですね、あさってぐらいがつかいかも」

「おい！ 追い討ちをかけてどうする。」まだお年と言うにははやすぎます、ぐらいいったらどうなんだ。どう言う教育をしてんのかねこの病院は」

花光ナースが昼食時に、食欲をなくして困っているぼくに元気よく、「はい。島岡さん。竹の子ごはんですよ。おいしそう！」

「ありがとう。ハナビカリさん。」

「ひっどーい。ハナミツです。そんなことばかり言うんなら、このご飯私が食べちゃうぞ」

「君みたいに、患者の食事をもの欲しそうにいうナースは他に知らんな。この病院はナースにどんな教育をしてんだろう」

廊下を歩いていると、大家ナースと花光ナースが立ち話をしている。

「どけどけ」というと大家ナースが大げさに飛びのいて、

「あー、びっくりした。襲われるかと思った。」

「どうしてぼくの考えていることが分かっちゃうのかな？ 心理学的に言うとこれはむしろ襲われたい願望と解釈できる」

花光ナースはいめんこい顔に似合わず笑いつづけているので、

「はなびかりさん。大家さんが怖がるのがぼくは分かるんだ」といって、

いつかの月夜の晩、大家さんの2度目に夜勤のときに、「ぼくは狼男に急変する」とって「決して仮眠をとらないように」と注意したことがある、ことを言った。

花光ナースがまた笑って「がはははは、島岡さんっておかしーい」

ぼくは真顔で彼女に言った。

「可笑しがっている場合か。君たちよりぼくのほうがこの病院は長いんだ。ここだけの話、この病院に狼男が出るって。ほんとだよ。深夜午前零時、君たち夜勤のとき懐中電灯をもって病室を巡回するだろう？ 気をつけろよ。ベッドの上で手を振っている奴が狼男だ」

その晩、ぼくはもちろん誘民剤を服用しないで、午前零時まで目を開けて手を振っていた。

大家ナースが今朝、「今日島岡さんの担当になりました」と言いに来た。

「久しぶりだなあ。ぼくを避けて逃げ回っていたという噂だよ」

「はい、じつはー。」

「そうだろうと思った。ずいぶん嫌われたからねえ」

夕方彼女が退勤のときにやってきて、

ぼくにというより妻に向かって

「あしたご退院でおめでとうございます」

「それじゃ、よっぽどうれしいんだ」

ぼくの相手にならないで、

「実はご退院、わたしさびしいんですよ」

「ぼくはそんなに早く死にしまうのか？」

惜しまれながら世を去るのもいいものだなあ」

ぼくを無視して妻と彼女は挨拶を交わしていた。